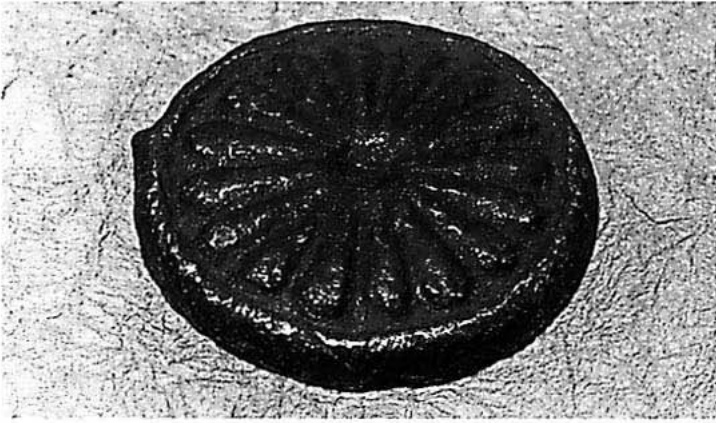


けられてナンボ——五位堂銭——

タウンウォッチャー 畠山欣也（関屋北）



香芝市には、古くからの伝統産業の一つに、**鋳物工業**があります。この鋳物工業に携わる方たちは「**鋳物師**」と呼ばれ、下田・五位堂の鋳物師の歴史は遠く奈良時代にさかのぼることが出来ます。

鋳物とは、溶かした金属を型に流しこんで作った品物で、製品としては、戦前は釣鐘・鍋・釜・火鉢・風呂などの日常生活品を製造し、戦時中には軍需品製造に従事してきました。戦後は工作機械や紡績機械部品の製造に転換し、現在は産業機械部品や各種工業用バルブなどが多くみられます。

特に釣鐘は、「江戸時代における大和の鐘の大多数は五位堂の鋳物師によって作られた」といっても過言ではないほど、今なお残っています。また、現存している鋳物製品の中で注目されるものに、五位堂の十二社神社の鳥居があります。これは総て鉄製の鑄造鳥居で、燈籠など五位堂鋳物師の遺作があり、江戸時代の銘が刻まれています。

さらに鑄造用の釜は五位堂釜として釣鐘と同様有名です。その釜屋職人が残り湯を使って鑄造したのが「五位堂銭」なのです。

五位堂銭は絵銭と呼ばれる類のもので、製作年代は他の絵銭より新しく、ガラス製の玉に取って変わられる明治中期

以後頃まで作られていたと言われています。

絵銭とは、明治以前の通貨であった円形、方孔の、いわゆる穴明銭に類似した形態のものに、福神像や駒、家紋、その他、故事に因んだいろいろな図柄を鑄出した貨幣類似品であり、「絵が描かれていた銭」として、古来「絵銭」と称していますが、通貨ではなく、作られた目的は子供の玩具として作られたものと、信仰対象として作られたものの二種類に分けられます。

五位堂銭は子供の石けり遊びの玉(玩具)として作られたと思われ、無孔で材質も鉄であることが多かったが、まれに亜鉛鑄のものもあり、図柄は紋章風のものが多かったとされています。

初期のものは比較的大型銭が多く厚肉であり、裏面の磨滅がはなはだしく、次期の五位堂銭は絵銭の名残りを止めた郭は残存するが、石けりに不必要な穴を埋めた鉄絵銭のみで、無孔にしたのは職人の手間を省いたためであろうとされています。三期は無孔で郭まで除去し銭型の面影を残すのは平面的なものだけでありました。後期になると表面が中高になり、石けりの機能をより強く持たせるものへと変えていったと思われま

また、鉄鑄製の五位堂銭と並行して作られた亜鉛鑄のものは、本来の子供の遊戯用の石けりは鉄のため重量が重いのと、地面の土色と鉄鑄の錆色が特に幼児には紛らわしいので、小型の幾分軽い色も地面と識別できる亜鉛鑄が要求されて作られたとされています。

絵の種類としては、兎や唐花・菊・西・牧牛などといったかわいらしい動物や植物の絵が多数描かれ、宝などといった漢字も描かれています。

今回、私は「五位堂銭」について取材しているうちに、歴史・文化財・自然の多い香芝に、伝統産業として根づいている鋳物工業の発展の過程の中において、昔、絵銭が存在したことに心を打たれました。取材する前は鋳物工業に関する知識もありませんでしたが、調査していくうちにだいたいのことがわかり始め、さらに専門の方たちと接して五位堂銭や鋳物に関することが理解できました。

このように今回もタウンウォッチャーとして取材させて頂いたおかげで、市民のいろいろな方たちと触れ合えたこと、まちのことを詳しく知ることができたことは、やはり香芝に愛着や誇りを感じる事ができました。こうした経験は私に地域の文化の向上やまちづくりの役に立って欲しいと思います。